

令和5年度博物館事業評価

戦略指標1 資料収集と保管・活用

資料1-2

・地域を特徴づける資料収集と保管 ・資料データ化と収蔵資料の充実 ・地域の文化を地域で保管活用

定量的評価

No.	内容	単位	R3 実績値	R4 実績値	R5 目標値	R5 実績値	考え方・基準	R5内訳等説明
1	新規受入資料件数	件	27	17	15	16	当該年度の受入件数	歴史6、民俗9、歴民両方1 (受贈12、購入3、移管1)
2	収蔵資料台帳のデジタル化件数(累計)	件	85,555	88,916	85,650	81,410	年度末時点のデジタル台帳登録件数(中期目標:R7年度10万件※台帳未整備含む全点推計約16万の62.5%)	本館資料点検作業で、重複や員数訂正が多数確認され、更正した結果大きく減少した。
3	新規受入資料の公開率	%	31	26	40	18	当該年度とその前年度(R4・5年度)の受入資料のうち、展示、刊行物、オンライン上などで紹介した件数の比率	・R4年度分4/17、R5年度分2/16 ・整理や調査、修繕を要し、速報的な公開に適さない資料が多い。
4	収蔵品オンライン検索システム「ある蔵」における公開件数(累計)	件	11,992	12,004	12,250	11,996	年度末時点の「ある蔵」公開件数(中期目標:R7年度12,500件、※デジタル台帳登録目標100,000件の12.5%)	内容の誤記等があるものを削除したため減少している
5	館内収蔵庫の点検・清掃回数	件	12	12	12	12	温湿度等環境の点検及び庫内清掃の回数	温湿度の点検を月に1回行い、適宜除湿、放熱、清掃等を実施した。
6	資料事故発生件数	件	6	0	0	1	資料の紛失、破損、汚損等の件数	小学校へ教材として貸出時に破損1件

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない -該当なし)

No.	評価項目	R4 自己評価	R4 委員評価	R5 自己評価	R5 委員評価	判断基準	自己評価理由
1	計画的な資料収集が行われている。	A	A4人 B3人	A	A5人 B2人	資料収集方針・資料購入基準に基づいている。	・方針・基準に基づき収集した。
		A		A		現状の収蔵環境を踏まえて、収集検討会議により受入を決定し、会議記録を残している。	・収集検討会議を毎回開催し、記録を残した。
		A		-		資料購入評価会の構成員をあらかじめ想定し、すぐに対応できるようにしている。	・博物館協議会や文化財保護審議会経験者を想定していたが、該当案件がなかった。
2	資料の保管が確実になされ、良好な状態に保たれている。	B	B1人 C5人 D1人	B	B2人 C5人	資料管理のフローチャートが運用されている。	・概ねフローチャートに沿って適切に行われた。
		A		A		収蔵庫の鍵の管理や機械警備の運用が厳格に行われている。	・鍵は施錠式キーボックスに収納、使用時は他者確認を必須、閉館時に有無確認。 ・機械警備は夜間全館、通常時は収蔵庫のみ実施。
		C		C		資料の収蔵場所を明確にするとともに、その場所への収蔵が確実に行われている。	・使用資料の原位置収納を複数確認で実施。 ・以前から乱れている部分は、改善の途上。
		D		D		全ての収蔵施設におけるデジタル台帳作成が計画的に行われている。	・本館の全点確認作業を優先し、外部収蔵施設のデジタル台帳作成を一時中断。
		B		B		収蔵庫の温湿度を常に計測し、必要な措置を講じている。	・常時温湿度を計測し必要に応じて扉の開放による放熱や移動式除湿機等で対応。
3	全ての収蔵施設が計画的に運用されている。	C	C6人 D1人	B	B1人 C6人	全ての収蔵施設について毎年現地点検を行い、必要な措置を講じている。	・全ての収蔵施設で現地点検を行い、課題の抽出を行った。
		D		C		全ての収蔵施設の資料を把握し、将来的な再配置の方針が検討されている。	・外部収蔵施設の資料把握を開始したが、数年を要する。再配置方針は今後検討。

4	収蔵資料の活用と見直し が図られている。	B	B5人 C2人	B	B4人 C3人	デジタルデータの公開活用が推進されている。	・「ある蔵」や「文化遺産デジタルアーカイブ」で推進。正確性や利便性に改善の余地。
		C		C		未整理資料や再整理を要する資料の活用に向けた確認・整理作業が推進されている。	・2か年の本館資料点検の中で、未整理・要再整理資料の状況を把握した。 ・伊場遺跡群弥生時代資料再整理など進めているが、未だ未整理資料は多数存在。
		A		A		他館への資料貸出、画像提供、資料熟覧への対応が内規に基づいて適切に行われている。	・適切に対応した。
		-		A		廃棄・移管・返却等に係る除籍手続きが基準に基づいて適切に行われている。	・除籍の基準に基づき、検討会議を開催して1件の除籍(廃棄)を決定した。

自己評価

分析・課題	【収集】収集方針・購入基準に基づき、収集検討会議に経緯や理由等の記録を残すなど適切に行った。 【保管】鍵の管理や機械警備は適切で、各所に防犯カメラを設置するなど防犯体制を強化した。資料の管理は適切に行われ、収蔵庫の環境維持も現状の設備の範囲で適切に対応した。外部を含めた収蔵庫の現地確認や資料の把握を開始したが、作業量が極めて多く、短期的な解決は難しい。また、デジタル台帳には重複登録や誤記、表現の不統一などが多く、改善を要する。 【活用】新規受入資料の速報的公開やデジタルデータの公開は、資料の置かれた状況がさまざまであり、想定よりも進みにくい。学校への貸出中に資料破損事故が発生した。資料の重要性と取扱注意事項が伝わっていなかったのが原因とみられる。修理困難であることから除籍基準に即して除籍手続きを適正に行い廃棄した。
-------	---

博物館協議会委員の評価・意見

【収集】 ・資料の散逸・滅失への危機が高まるなかで、博物館の役割は増している。さらに<u>積極的かつ柔軟な資料収集</u>を行ってほしい。 ・収集方針・購入基準はインターネットや年報等で公開して<u>収集の妥当性について説明責任を果たすことが望ましい</u>。 【保管】 ・保管に関する基準を作成して公開することが望ましい。 ・展示や調査研究・教育普及事業をやりながら収蔵庫の整理を兼務することは極めて困難である。<u>整理・保管・目録作成などを専門に行う人員の確保</u>を行ってもらいたい。 ・デジタル台帳の重複登録や誤記、表現の不統一などが多い問題は、今後対応に数年間掛かることになるでしょうが、<u>きちんとした台帳を作成する事に少人数で対応していけたら</u>、不備が出たときに連絡や確認が取りやすいと思いました。 ・全ての収蔵施設で現地点検を行い、課題の抽出を行えたことは、業務に携わる担当者の努力によるものと考えますが、<u>個人の裁量などによるものでなく、仕組みとして計画的に点検作業が行われる必要がある</u>。前年度に引き続き、全ての収蔵施設の資料が把握されておらず、デジタル台帳作成の完成が進んでいないことが課題である。 ・本館の収蔵確認を優先せざるを得ない状況は理解できる。そのために外部収蔵庫の確認やデジタル台帳の作成までなかなか手が及ばないというも、現状でのマンパワーを前提とすればやむを得ないかと思う。<u>外部収蔵庫の点検については、たとえば県内外の大学の学芸員養成課程と連携し、実習やインターンシップというかたちで点検作業を委ねる</u>とかはできないだろうか。 【活用】 ・資料を整理し公開するまでには、専門的知識を持った人材と多くの時間が必要になるため、<u>事業を推進するための人員や予算の確保</u>が必要ではないか。 ・学校への貸出中に発生した資料破損事故は、<u>どのような資料か、どういう状況だったかなど詳細がわからないので</u>、「資料の重要性と取扱注意事項が伝わっていなかった」と反省が適切・妥当かどうか判断できない。 【全体】 ・収集、保管、活用に係る基準を明文化して公開することが望ましい。収集から管理・活用までを一つの流れとして捉えるコレクション管理の視点で、館の運営方針の下に設置者と協議しながら関係文書の作成と公開、人員と予算の確保を早急に検討していただきたい。 【評価方法】 ・新規受入資料の公開率を評価の対象とする場合、例えば修繕を必要とするため即座に公開できないが学術的価値は高い資料を受け入れると、公開率が下がりが問題と判定されるのではないか。受入資料の状態に即した適切な措置を施したかどうか(修繕が必要なら修繕し、公開可能であれば公開するなど)を評価の対象とした方がよいのではないか。
--

今後の方策

・(全体)資料管理状況の改善を当館の最重要課題と位置づけ、人員配置と予算確保を図る。 ・(収集)収集方針・購入基準に基づき、収蔵庫の状況を考慮しながら、適切に資料を収集する。 ・(保管)デジタル台帳の改善を本館分から早急に行い、資料の特徴や保管場所等を把握できる管理体制を整える。 ・(施設)全収蔵施設の運営方針を定め、各地域における資料の適切な保管と活用を進める。 ・(活用)紛失や汚損への対策を図りながら、さらなる活用を推進する。 ・(基準)資料管理業務全体の方針や基準を定めた要綱を作成し公開する。

戦略指標2 調査研究

・学芸員の質の向上 ・地域の研究機関との共同研究 ・地域資料の掘り起こし

定量的評価

No.	内容	単位	R3 実績値	R4 実績値	R5 目標値	R5 実績値	考え方・基準	R5内訳等説明
1	学芸員が講演・講座等の講師を務めた件数(外部での実施を含む)	件	12	19	15	11	外部での研究発表や出前講座も含む。連続講座は1回。ギャラリートーク、展示解説は非該当。	はまはく講座3件、連続講座1件(初歩の古文書)、出前講座5 件、外部依頼2件
2	学芸員の学術的著述本数(外部での掲載を含む)	本	3	6	3	5	館報・図録・報告書や、外部研究誌等へ記名の著述掲載本数。連載は1本。2年目以降の学芸員1人1本目標。	学芸員A:2本(館報2)、学芸員B:2本(外部1・館報1)、学芸員C:1本(館報1)
3	学芸員が調査に向いた件数	件	24	27	20	35	外部での資料調査、熟覧、視察など。同一調査に複数回でも1件。	歴史14件、民俗14件、考古4件、博物館学3件
4	他機関と連携した調査研究の件数	件	6	5	6	4	大学、機関、研究者等との調査研究連携件数。イベント等のみは含まない	静岡文芸大(染色型紙)、静岡大2(滝沢鍾乳洞・蜷塚遺跡)、大橋幡岩資料調査プロジェクト(大橋ピアノ)

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R4 自己評価	R4 委員評価	R5 自己評価	R5 委員評価	判断基準	自己評価理由
1	調査研究が学芸員の重要な業務の一つとして位置づけられている。	C	B1人 C6人	C	C7人	調査研究とその他業務における適切な業務量の配分と分担がされている	・調査研究の必要性は共有され、他業務との配分も是正を進めたが、十分とはいえない。
2	調査研究の環境が保たれている。	D	C6人 D1人	C	B2人 C5人	調査研究に必要なスペースが確保され、機材が適切に配備されている	・館内の物品整理を進め、十分ではないが調査研究スペースの確保に努めた。 ・PC等を更新し画像や原稿編集等の機能を拡充した。
		C		C		調査研究スペースにおいて整理・整頓が日常的に行われている。	・調査研究スペース確保のための整理・整頓の実施は継続中である。
		B		B		調査、視察、研修、有識者指導など学芸員の資質向上に必要な予算が確保され、積極的に活用されている。	・図書購入費や出張費等の予算はおおむね確保され、有効に活用した。

3	調査研究が適切な内容・方法で行われている。	C	A1人 B4人 C2人	B	A1人 B5人 C1人	設定されたテーマに基づいて質の保たれた調査研究が計画的に行われ、講座等で市民に還元している。	・「蜷塚遺跡」は再整理等進めた内容をパンフレットとして刊行した。 ・「家康伝承」や「度量衡」など担当職員が調査を進めた内容で展示や講座を行った。
		B		B		学芸員が外部機関との共同研究に参画している	・「機械染色の型紙」は大学側と覚書を締結して整理作業や展示等を行った。

自己評価

分析・課題	・学芸員が行政的な業務等も抱え、調査研究スペースも十分ではない中でも、調査研究の重要性についての共有は図れてきた。講座の講師対応や学術的著述、資料調査は精力的に行われた。 ・調査研究のうち「家康伝承調査」は講座、「蜷塚遺跡」は講座、パンフレットの刊行で市民へ還元した。その他「伊場遺跡群」、「浜松城」、静岡文化芸術大学との「浜松の染色の型紙」共同研究など継続中の調査研究については、タイミングを見ながら成果を公開していく。 ・外部機関との連携した調査研究は行われているが、担当学芸員の専門外の分野が多いこともあり、資料の提供や基礎作業が中心になりがちである。
-------	---

博物館協議会委員からの評価・意見

【調査研究の位置づけ、環境】 ・学芸員さんの人数がやはり少ないと思います。1人に対しての業務が多いのに専門外の分野の調査研究となれば、大変だと思います。担当職員の方のパンフレット作成や展示や講座は、市民の方達も楽しめたのではと思います。 ・学芸員の調査研究活動は、<u>博物館事業にとって重要なものである</u>ので、<u>より一層の環境整備を</u>すすめてほしい。 ・蜷塚遺跡や徳川家康に関する再整理や調査が進み、パンフレット発行や展示、講座が行われたことは、地域の重要な観光資源という観点からも、市民に還元する意味は大きいと言える。かねてより指摘されている課題であるが、学芸員が行政的な業務も担当しているため、<u>調査研究業務に専念する環境がまだ十分であるとは言えず、他業務との配分を更に進めなければならない</u>。 ・学芸員が行政的な業務も抱え、調査研究スペースも十分ではない中でも、頑張っていたいただいていることはよく理解できる。しかし、学芸員の職務職責や調査研究の重要性は、博物館内では共有されているとしても、<u>行政組織全体で共有されなければ調査研究の環境向上は期待できない</u>のではないかと。 【学芸員の質の向上】 ・調査研究は単年度で成果がでるものではなく、複数年あるいは中長期的な計画で成果が展示、紀要、講座等で市民に還元されることが望ましい。<u>学会や各種研究会への出張や参加を積極的に行い、最新研究の情報収集とネットワークの構築を引き続き行</u>ってほしい。 ・「設定されたテーマに基づいて質の保たれた調査研究が計画的に行われ、講座等で市民に還元している」という判断基準は、後半部の「講座等で市民に還元している」という観点からは評価できるが、「質の保たれた調査研究」がどれだけ遂行されているかは疑問である。学芸員には、<u>専門性の高い学会で研究成果を発表するとか、同じく専門性の高い学会誌に論文を掲載できるレベルの調査研究を目指して</u>いただきたい。 【評価方法】 ・連続講座や同一調査が一律に一回として計算されているが、<u>内容が異なれば複数回として計算してもよい</u>のではないかと。

今後の方策

(全体)成果の市民への還元まで含めた調査研究の計画を定め、調査研究の重要性を庁内外に示していく。 (調査研究の位置づけ、環境) ・学芸員の調査研究活動を必要な業務の一つとして位置づけ、業務全体の存廃や分担等の見直しを進めていく。 ・館内の物品の整理を進め、資料整理や調査研究のしやすい環境を整える。 (学芸員の質の向上) ・研修・研究会等への参加、先進地視察、有識者招聘による指導などを通じて、学芸員の知識・能力の向上やネットワークの形成に努める。 ・質が高い中長期の調査研究を継続できる人事のあり方について、庁内で調整を進めていく。
--

戦略指標3 展示・教育普及活動

・浜松市と関連のある展示の企画 ・学校や地域と連携した講座やイベントの開催

定量的評価

No.	内容	単位	R3 実績値	R4 実績値	R5 目標値	R5 実績値	考え方・基準	R5内訳等説明
1	観覧者数(本館)	人	29,311	31,547	35,000	26,239	本館合計(アウトリーチを除く)	本館資料点検を優先し、展示や教育普及を減じた影響か
2	観覧者数(分館)	人	21,762	22,859	25,000	17,599	5館合計	舞阪4,112、姫街道銅鐸3,555、浜北8,663、春野702、水窪567 本館資料点検優先による企画展の減や大規模修繕に伴う浜北3ヶ月休館の影響か
3	企画展開催件数	件	7	8	6	6	特別展、テーマ展、小展示(スポット展示、外部での展示含めず)	テーマ展2件、小展示4件
4	企画展の満足度	点	7.5	7.7	7.7	7.4	アンケート(10点満点)平均値。展示毎に算出、その平均とする。	家康伝承7.6、はかる7.3
5	分館における企画展開催件数	件	18	23	12	7	巡回展や企画展のほか、各所管部署や指定管理者主体の展示も含む。	本館主体4件、分館主体3件
6	講座開催件数	件	9	14	10	4	館主催の講演会・講座の回数。出前講座は含まず。連続講座は1回。	はまはく講座3回、初歩の古文書講座(連続)1件
7	体験事業満足度	%	99	9.3	9.0	8.8	アンケート(10点満点)の平均値。事業毎に算出し、その平均とする。 ※R3年度は4段階評価時の数値	GW8.8、夏休8.6、冬休9.2、春休8.6
8	学校移動博物館開催件数	件	10	9	6	10	学校へ博物館職員が出向き展示・体験学習の実施	三ヶ日西小、横山小、新津小、舞阪小、飯田小、伎倍小、佐藤小、都田小、南の星小、都田小
9	教材貸出件数	件	99	94	100	92	学校等への教材用資料や体験学習用具の貸出件数。	小学校83件、中学校6件、協働センター3件
10	常設展内の資料更新回数	件	2	5	4	4	常設展の部分的な展示更新の回数(期間限定の展示を含む)。	期間限定展示2、区名変更、展示パネル更正
11	レファレンス対応件数	件	31	80	45	69	来館、メール、電話等による件数合計。	来館37、電話31、メール1

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R4 自己評価	R4 委員評価	R5 自己評価	R5 委員評価	判断基準	自己評価理由
1	本館は、市内の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、市内外の人びとが浜松市を理解し、知的好奇心を満たすことができる場である。	D	B7人	C	B7人	常設展の魅力向上に取り組むとともに、多様性への対応(多言語・音声・ハンズオン・配置・文字サイズ・難易度等)を進めている。	・期間限定展示の実施、解説の見直し等を行った。 ・多様性への対応がほとんど進められなかった。
		B		A		計画的な企画展の開催により、収蔵資料を効果的に公開している。	・大河ドラマに合わせた家康の展示や、収蔵資料の豊富な度量衡の展示を予定通り開催
		B		B		展示や教育普及事業において、デジタル技術を活かした効果的な事業展開を行っている。	・QRコードによる情報提供、デジタルアーカイブへ誘導 ・講座の動画配信や申込オンライン化を推進 ・双方向性の事業は未実施
		B		B		速報展など時節や市民ニーズに即応した柔軟な事業展開を行っている	・大河ドラマに合わせた展示、講座の開催 ・事業数自体の少なさ

2	分館は、各地域の歴史文化について正確でわかりやすい解説が行われており、知的好奇心を満たすことができる場である。	B	B7人	B	B6人 C1人	各地域の特色を生かした常設展示が行われている。	・各地の文化財や歴史の展示をしている ・更新をほとんどしていない。
		B		B		各分館の地域の人々や担当者の意見や要望が、企画展示等の事業に反映されている。	・各分館担当者と調整して企画展の内容を決定している。 ・各担当や指定管理者が自主事業を実施。 ・周知に課題
3	学校の学習内容に即した見学・体験のプログラムを行うとともに、授業を支援する教材を提供している。	A	A5人 B2人	A	A5人 B2人	主に小学校3年生と6年生の学習内容に合わせた見学・体験プログラムが構成されている。	・3年生に昔の道具体験、6年生に遺跡見学や展示解説などを実施
		A		A		学校のニーズ等を把握し、見学・体験プログラムの改善に努めている。	学校移動博物館を学年ごとでも対応し、各学区の歴史資源の紹介に努めている。
		C		C		デジタル技術を用いたオンライン上での学習支援を進めている。	・オンラインでの双方向の講座を学校と連携して1件実施 ・子供向けページなど検討段階で実施に至っていない
4	市民に学びの場を提供している。	C	B6人 C1人	B	A1人 B6人	来館者が理解を深められるオンラインの活用を含めた効果的な講座や展示解説等を開催している。	・講座のオンライン配信を推進 ・教育普及事業が企画展や体験館開催時に偏りがち
		-		A		博物館実習をはじめ、多様な研修を受け入れている。	博物館実習、教員研修、中高生の職場体験などを受け入れた
5	浜松の歴史や文化を題材とした体験学習事業を行っている。	A	A4人 B3人	A	A5人 B2人	展示や講座等と関連付けた体験学習事業の開催により学習の相乗効果が高められている。	銅鏡づくり体験、アイロンがけ体験など常設展開連メニューのほか、企画展等の内容に沿った内容を心掛けた。
		B		B		幅広い層が学びながら楽しめる体験学習プログラムを開発している。	・家族一緒に楽しめるメニューを用意している。 ・マンネリ化が課題。

自己評価

分析・課題	・観覧者数は、本館資料点検業務を優先し、展示や教育普及事業を減らしたことや、分館1館で約3ヶ月間の臨時休館を設定したことなどにより減少した。 ・常設展は展示の改善を進めているがまだ途上である。企画展は数を減らしながらも計画通り実施することができた。 ・分館の展示については、常設展示の更新の少なさが課題である。 ・教育普及事業は、定期的な開催でないことやマンネリ化が課題である。 ・学校連携事業は、基本的に順調に行えている。オンライン活用があまり進んでいない(ニーズも少ない)のが課題である。
-------	--

博物館協議会委員からの評価・意見

【展示】 ・大河ドラマに合わせた展示など、市民だけではなく他県の方達にも喜んでいただけたのではと思います。 ・NHK大河ドラマで当地域が取り上げられたことを好機と捉え、徳川家康に関する展示や度量衡の展示を開催したことは、<u>観光客の取り込みや市民の来場者を増やした可能性がある。</u> 【学校連携】 ・職場体験だけではなく、長期休みの時などの物作り体験のボランティア活動を、中高生に呼びかけてみてはいかがでしょうか。小中学生の保護者が登録している「<u>さくら連絡網</u>」などの活用は出来ないのでしょうか。 ・学校連携事業でオンライン化のニーズが少ないようなら、無理して進めるよりも、他の部分に注力した方がよいように思う。 【地域】 ・市域が広い浜松市にとっては、各地域に根差した分館の役割は大きいので、より積極的に事業を展開してほしい。 ・「資料点検業務を優先し、展示や教育普及事業を減らした」とはいえ、本館での展示事業はじゅうぶんに果たされていると思う。限られた人員で学校との連携や教育普及、実習や研修の受け入れなど、職員の皆様のご苦労とご尽力の賜物かと思えます。その一方で、分館おける展示の更新の少なさやマンネリ化は、やはり課題といえるだろう。分館での地域性を活かした企画展示も進められているが、さらに<u>地域住民を巻き込むような企画と広報を工夫していただきたい。</u>また、分館は、むしろ規模の小ささを活かして、県内外の大学と連携した博物館実習の受け入れや、連携した大学生による展示の企画・立案、運営なども試みてはどうだろうか。 【多様性】 ・障害者差別解消法改正に伴う対応ができるハード・ソフト両面からの対応を早急に整備することが必要。 ・多様性への対応は浜松国際交流協会(HICE)との協働でワークショップの開催や展示への改善提案など、できるところから進めていただきたい。 ・社会の流れという意味でも、<u>多言語・音声・ハンズオンなど多様性への対応は優先順位の上位にあたる</u>と考えられる。特に、<u>当地域には、数十ヶ国の外国人が居住しているため、教育的な見地からも多言語への対応は急務である</u>と考える。
--

今後の方策

(常設展)・内容の更新に継続的に取り組みながら、多様な層の観覧者を受け入れられる展示手法を整えていく。 (企画展)・市民のニーズを踏まえつつ、資料整理や調査研究の成果を活かして企画展を開催する。 (教育普及)・硬軟織り交ぜて、幅広い層に届く工夫を行い、浜松の歴史の魅力を幅広く伝えていく。 (学校連携)・校外学習による来館を促進しながら、移動博物館やICTなど学習手段の多元化を進めていく。 (分館)地域や学校等と協力して、分館や収蔵施設で地域に根ざした展示・教育普及を進めていく。
--

戦略指標4 市民協働

・ボランティア活動の充実 ・地域団体等との相互協力 ・市民主体の文化創造

定量的評価

No.	内容	単位	R3 実績値	R4 実績値	R5 目標値	R5 実績値	考え方・基準	R5内訳等説明
1	地域団体等と連携した事業の実施件数	件	4	3	3	3	自治会や市民団体等との連携による館内・蜷塚公園・伊場公園を利用したイベントなど(連続するものは1件)	映写会・タケノコ掘り(自治会)、昔話の語り聞かせ(市民団体)
2	市民参加型事業の開催件数	件	2	2	2	0	共同調査、意見聴取型WS、協業などの件数	該当なし
3	出張展示開催件数	件	1	1	3	1	外部の店舗や施設から依頼を受けて出張展示を行った件数	半田山北公会堂(下滝遺跡出土遺物の展示)
4	出前講座等開催件数	件	8	11	10	7	依頼を受けて講座に出向いた件数	市民団体等5件、行政機関主催事業2件
5	他団体共催事業件数	件	6	5	5	3	展示、講座、イベント等で調査研究は含まない	豊橋市自然史博物館(干支展)、お話つむぎの会(旧高山家住宅で昔話の語り)、市教育研究会(社会科自由研究優秀作品展)
6	ボランティア参加延べ人数	人	442	356	450	357	ボランティアの延べ活動人数(研修除く)	・主な活動である体験学習事業の日数を減らしているため
7	ボランティア養成事業開催回数	回	8	10	6	5	講座、報告会、実習等の資質向上に関する事業の開催回数	・養成講座4回・説明会1回

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R4 自己評価	R4 委員評価	R5 自己評価	R5 委員評価	判断基準	自己評価理由
1	博物館の事業運営をボランティアなど市民協働で推進している。	B	B6人 C1人	B	B7人	ボランティアの募集・育成・活動の拡充を進めている	・ポスターやHP等で募集し、講座で育成し、教育普及の補助や展示ガイド等を行っている ・主要人材や内容が固定化し、高齢化も進む。
		B		B		ボランティアにインセンティブ(講座等事業の優先参加や個別サービス等)や企画提案の場を用意するなど意欲向上の取り組みを進めている	・教育普及では運営補助を依頼しながら一般申込より優先的に参加させている。 ボランティアの企画提案による事業は多くない。
		B		B		シティプロモーションを意識した事業展開を官民連携も含めて進めている。	・注目度の高い事業(家康伝承)を展示や講座で取り上げた。 ・家康以外の注目を集める展開がなかった。

2	博物館の事業が、新たな文化創造や社会の課題解決に寄与している。	-	B5人 C2人	B	B4人 C3人	市民団体等に博物館や蜷塚公園でのユニークペニユーを促進している。	・結婚式や七五三の前撮りやYouTubeの撮影等で活用されている。 ・使用ルールが明確でない
		C		C		社会の課題解決に向けた事業展開を図っている。	・障害者等の受入れはソフト面では個別対応している ・ハード面の対応(音声ガイド、ハンズオン等)に遅れ
3	地域との連携が良好な関係性のもとで行われている。	B	B7人	B	A1人 B5人 C1人	地域住民の活動の場として博物館や蜷塚公園が有効活用されている。	・自治会のイベントや写真会などに会場を提供している。 ・活用のルール等が明確でない
		B		B		地域との連絡・調整体制が築かれている。	・自治会会合に出席し随時連絡もしているが、頻度は少なめ
4	各分館が地域の特色を示すとともに課題解決の場となっている。	B	B7人	B	B5人 C2人	分館事業に対する感想や各地域の要望を把握し、課題の改善に努めている。	分館担当者を通じて地域の意向や要望の把握に努めているが、声が届きにくいこともある
		B		B		分館担当者や指定管理者との定期的な連絡・調整の場を設定している。	年に1回市担当者会議を行うほか、指定管理者とも定期的に協議しているが、頻度を増やせていない。

自己評価

分析・課題	・展示解説や体験学習など、市民が主体的にボランティア活動や事業に参画する場を設けている。若年層のボランティアも一定数存在するものの、その多くが学生や会社員であることから、平日の学校団体見学時に主力となる層の高齢化が課題となっている。 ・地域でのアウトリーチやイベントやユニークペニユーの開催は一時期より要望が増えているが、促進を図るためのルール等が明確になっていないのが課題である。 ・各分館では地域に根差した事業が展開されているが、運営主体の取り組みに地域差は生じている。
-------	---

博物館協議会委員の評価・意見

【多様な層の受け入れ】 ・障害者の方達へのハード面対応は、早めに対応すべきだと思います。 【地域との連携】 ・指標3-2(分館の展示・教育普及)や指標2調査研究とも関連し、<u>分館との連携を強めることが必要</u>と思う。 ・浜松市、本館、分館(指定管理者も含む)の<u>ミーティング回数を増やすとともに、可能であれば人員の交流を制度的に構築</u>してもらいたい。 ・評価項目4「分館が地域の特色を示すとともに課題解決の場となっている」という項目について、「地域の意向や要望の把握に努めている」「市担当者会議を行うほか、指定管理者とも定期的に協議している」との自己評価には妥当だろうか? 「地域の意向や要望」と言ってもなかなか把握しづらいだろうし、それを企画・展示に反映させるとしてもマンパワーが限られる分館では難しいこともあるかと思います。そこで、繰り返すようですが、<u>県内外の大学と連携し実習学生による企画・立案、運営などを試みてはどうだろう。</u> 【ユニークペニユー】 ・ユニークペニユーはルール作り、受入れ体制の構築、広報計画の策定などやるべき課題は多い。浜松市と連携して市全体のユニークペニユーの位置づけの中で検討する必要がある。 ・ユニークペニユーの促進は、蜷塚遺跡の再整備ともかかわる事項である。他自治体の施設でイベント開催の際トラブルになることもあったと聞いているので、<u>事前にルールを明確にした上で、活用促進を図ってほしい。</u> 【ボランティア】 ・ボランティアの再編や活性化は片手間でできる事業ではない。<u>本気で取り組むならば専属のボランティア担当を配置</u>するなど、組織的な検討が必要。 ・ボランティアについては、ポスターやHP等での募集や講座などでの育成も行っているとのことと評価できるが、<u>インセンティブを与えたり企画提案の機会を与えたり</u>という点において不十分で、今後のボランティア募集、育成などについて更なる対応策を検討する必要がある。
--

今後の方策

(ボランティア) 現状の従事内容の検証を進め、募集方法や意欲向上の取り組みの見直しを図る。 (地域連携) ・分館や地域との対話機会を増やし、地域での協働について調整を図る。 ・アウトリーチを積極的に行いながら、その機会に地域の課題や希望などの把握を図る。 (社会の課題解決) ・館内環境の向上を現状でできる範囲で行い、障がい者をはじめどのような人でも快適な来館となることを目指す。 ・現代社会における課題について、歴史と結び付けた事業の展開を図る。 (市民の利用促進) ・館内や史跡公園の利用ルールを定めた上で、利用促進のための取り組みを行う。
--

戦略指標5 情報の発信と公開

・SNSによる情報発信 ・多言語対応ガイドシステム導入 ・観光訪問者への情報提供

定量的評価

No.	内容	単位	R3 実績値	R4 実績値	R5 目標	R5 実績値	考え方・基準	R5内訳等説明
1	SNSフォロワー数	回	-	1,936	2,100	2,142	ツイッター、Instagramの年度末時点のフォロワー数。	双方ともにこまめな発信を心掛けた
2	HPアクセス数	件	75,501	85,522	80,000	68,719	博物館HPのトップページアクセス数。広聴広報課で把握。	令和4年度からは大きく減少した。展示や教育普及の件数を減らしたのが要因と推測される。
3	アップした動画の平均再生回数	回	642	391	500	635	年度内にアップした動画の年度末時点の再生回数の平均値	2本計1,271回
4	報道取り上げ回数	回	84	52	100	32	新聞・ラジオ・TV・雑誌等の取り上げ回数	新聞6、ラジオ1、TV3、雑誌14、インターネット8

定性的評価 (A達成 Bおおむね達成 Cもう少しで達成 D達成していない)

No.	評価項目	R4 自己評価	R4 委員評価	R5 自己評価	R5 委員評価	判断基準	自己評価理由
1	効果的な情報発信の手段や方法が選択されている。	A	B6人 C1人	A	B5人 C2人	・過去の実績やアンケート等に基づき、事業の規模や対象に合った情報発信手段(広報誌、ポスター・チラシ、広告、HP、SNS等)を適切に選択している。	子供向け事業は広報効果の高いチラシを学校を通じて配布するなど、内容により配布先や部数を変えたり、速報性・ニュース性の高いものはインターネットでの広報を強めるなど工夫した。
		C		C		・収蔵品検索システム「ある蔵」の、内容の充実と見やすさの改善に努めている。	・利用の多い資料をトップページに配するなど、見やすさや利便性向上に努めているが、構造的な限度がある。 ・掲載内容に一部不備がある
		B		B		・積極的な報道発表を行い、報道機関を通じた情報発信に努めている。	・市政記者クラブのほか、インターネットメディア等にも情報提供を行った。 ・記者が記事にしやすい資料構成などを検討の余地がある。
2	市内外の幅広い層に向けて博物館の周知を行っている。	C	B3人 C4人	C	B3人 C4人	・展示解説やパンフレットなど多言語化への対応を進めている	・常設展の英訳の修正を行ったが、外国語の音声ガイドやパンフレットは未作成である。
		B		B		・観光施設や宿泊施設等との連携を深め、博物館の広域的な周知に努めている。	・チラシやパンフレットを配架してもらいSNSで相互フォローするなど連携している。 ・新規の相手方をあまり増やせていない
		B		B		・地域の魅力を紹介することで、地域に対する関心を高めることができたか。	各地域の歴史資源や資料を紹介しよう努めたが、来館に十分つながっていない面がある

3	博物館の多様な所蔵資料や活動内容についての情報を発信している。	A	A1人 B6人	A	A1人 B6人	・刊行物(図録、博物館報、博物館だより、博物館情報等)が計画通り発行されている。	計画通り発行した
		B		B		・HP等における事業の動画や資料、収蔵品の情報などにインターネットを活用した来館できない人向けの情報提供に努めている。	・講座の動画配信を行った。 ・「浜松文化遺産デジタルアーカイブ」に資料の追加公開し、ダウンロードによる画像利用を申請不要とした。 ・来館できない人向けの展開(展示紹介など)が不十分
		B		A		・SNSでは事業の開催周知だけではなく、日々の活動状況も公開することで、博物館事業への理解が深められるように努めている。	学校移動博物館の様子や販売品の紹介のほか、調査研究や研修など普段市民の目に触れない情報を発信した。

自己評価

分析・課題	・来館者アンケートの結果からは、来館者の情報源はチラシや広報はままつなど、紙媒体の方が依然として多いが、除所にインターネットの情報で訪れる人も増えている中で、HPやSNSなどオンラインによる効果的な周知には至っていない。 ・公開されている収蔵品検索システム「ある蔵」は、見やすさ、使いやすさの面でやや使いにくい面が残るとともに、点検作業の中で記載内容等に不備が一部見つか、修正を要する状況となっている。
-------	--

博物館協議会委員の評価・意見

【広報】 ・長期休み前などで学校配布されているチラシ配布時期を、もう少し早めにしてみたらと思います。 ・若年層は広報はままつを見ていると思えないです。 【情報の公開・発信】 ・「ある蔵」などの情報発信については、見やすさも重要であるが、常に活用できる状態にしておくことが重要と考える。 ・収蔵品システム「ある蔵」については、外部のポータルサイト、ジャパン・サーチ等と連動するなど情報の拡散に努めてもらいたい。 ・学校移動博物館の様子や販売品の紹介、日々の調査研究の様子を発信することは、市民が博物館の取り組みを理解する上で貴重な機会となるため評価できる。収蔵品検索システムは、博物館を直接訪れる目的でない人も利用するものであるため、使い勝手を良くすることで、新たに収蔵品が注目される可能性があり、来館者増加につながることも考えられる。使いやすさの向上について広く利用者から意見を集めるなどの方策が必要であると考え。 ・ホームページやSNSによる情報発信はたしかに必須だろう。しかし、たとえば浜松市美術館のX(旧Twitter)はフォロワー数が9433であるのに対して本館のXはフォロワー数が1718にとどまっている。浜松市美術館のXは2012年から運用されていて、本館のXは2020年からの運用であることを踏まえると、フォロワーの差は「8年差」の違いと言えなくもないが、実は、浜松市美術館からのフォローが336であるのに対して、本館からのフォローが177。つまり本館から他のユーザーへのアプローチが少ない点が気になる。フォロワーを待つだけでなく、他のユーザーへのフォローを積極的に進めてゆくことも必要ではと考えます。電子媒体による発信の必要は理解できますが、現時点ではまだ紙媒体での発信に優位性が認められるようです。紙媒体での発信の有用性の再評価と戦術の再検討も必要かと思われます。 ・刊行物は著作権の処理は必要だが、可能な限り紙媒体に加えてPDFでも公開するように努めてもらいたい。 【多言語対応】 ・音声ガイドについては浜松市楽器博物館の導入事例を参考にされたい。 【その他】 ・来館などに直接つながらなくても、地域の歴史資源の紹介などは意義のあるものであり評価できる。
--

今後の方策

(広報)紙媒体とインターネットの両輪で、事業内容により効果的な方法で周知していく。 (情報発信) ・収蔵資料検索システム「ある蔵」は早急に内容を修正するとともに、別に活用している「はままつ文化遺産デジタルアーカイブ」「文化遺産オンライン」との役割分担を行っていく。 ・刊行物は、販売状況を見ながら、HPや「全国遺跡報告総覧」へのPDF掲載を進めていく。 ・SNSは、市の運用ルールに基づきながら注目される記事を作成し、閲覧者の増加を目指す。 (多言語対応) ・常設展の解説文など着手しやすいところから進め、音声ガイドやスマートホンの解説アプリなどにつなげていく。
--